

# 魚病診断結果について

湯浅明彦

水産研究所では魚介類の感染症（魚病）による被害を軽減するために、魚病対策の指導を行ってきた。また、魚病の発生やまん延を防止するため、魚病の監視や養殖場の巡回指導を行っている。今年度の魚病診断の件数と診断結果について報告する。

## 魚病診断件数

平成19年4月から平成20年3月の間に59件の魚病診断を実施した（表1）。魚病診断の対象魚は、養殖魚以外の魚

種も含まれている。海面では蓄養中の養殖種苗（クロマグロ）と中間育成中のクルマエビ種苗、内水面では観賞魚（ニシキゴイ）、衰弱した河川生息魚（タカハヤ、カワムツ）及び徳島市内の溜池で死亡したゲンゴロウブナが該当する。コイの診断にはニシキゴイの他に、KHV（コイヘルペスウイルス病）検査の対象である公共用水面で死亡したマゴイが含まれている。前年度と比較して、診断件数は海面で2件、内水面で5件減少した。

表1 魚種別の月別診断件数

	魚種名	年 H19										H20			計		
		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
海面	ブリ（当オ）					1		1									2
	ブリ（1オ以上）		1		1				1								3
	カンパチ								1		1			1			3
	ヒラメ		1					1		1							2
	ヒラメ（稚魚）		1														1
	トラフグ						1										1
	マダイ								1								1
	クロマグロ							1									1
	イシガキダイ										1						1
	クルマエビ							1									1
	小計		3		1	2	3	4	2	1				1			17
内水面	アユ		3	1	2	3	4	2				3	3	4	3		28
	ウナギ		1		1	2									1		5
	コイ			1	1				1	1			1				5
	カワムツ		1	1													2
	タカハヤ		1														1
	ゲンゴロウブナ						1										1
	小計		6	3	4	6	4	3	1			3	4	4	4	4	42

表2 海産魚の魚病診断結果

魚種名	病名	年 H19										H20			計		
		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
ブリ	類結節症					1											1
	ベネデニア症				1												1
	白点病								1								1
	不明		1														1
カンパチ	血管内吸虫症										1			1			2
	白点病								1								1
ヒラメ	ピブリオ病		1				1										2
	エドワジエラ症									1							1
ヒラメ稚魚	健康診断		1														1
マダイ	白点病								1								1
トラフグ	ヘテロボツリウム症						1										1
クロマグロ	ピブリオ病						1										1
イシガキダイ	白点病										1						1
	滑走細菌症										1						1
クルマエビ	ウイルス性急性血症（PAV）					1											1
合計			3	1	2	3	3	3	1					1			17

### 魚病診断結果

海面の魚病の多くは寄生虫症であり、ベネデニア症（ブリ）、血管内吸虫症（カンパチ）、白点病（ブリ、カンパチ）、ヘテロボツリウム症（トラフグ）などが発生した（表2）。また、類結節症（ブリ）、ピブリオ病（クロマグロ、ヒラメ）、エドワジエラ症（ヒラメ）などの細菌感染症が発生した。類結節症は幾つかの薬剤に耐性を示し、病魚は他県から購入した種苗であった。クロマグロの病魚は体表にスレによる炎症があり、ピブリオ病に二次感染したものとする。マダイとイシガキダイは屋内の水槽で飼育していたもので、同じ濾過槽を使用したために白点病に感染した。白点病を予防するために、塩分濃度を下げて飼育していたイシガキダイが滑走細菌症を発病した。

内水面関係の診断件数の6割をアユが占めた（表3）。アユの診断件数の約5割が冷水病によるものであった。池入れしてまもない1月から3月のアユの人工種苗に、運動性

エロモナス病が発病した。同病は成長の劣る人工種苗に発病したが、死亡数は少なかった。アユの成長期の7月に、腸の炎症を特徴とする死亡がみられた。その原因は、配合飼料を過食したことによるものとする。

ウナギの診断結果は、ほとんどが*Edwardsiella tarda*の感染が原因であるパラコ口病であった。この病気は春から秋に多く発病し、投薬による治療後も再発を繰り返している。

河川の中・上流域に生息するカワムツとタカハヤが粘液胞子虫症を発病した。同症状とカワムツの水カビ病は、ある特定の水域で発病したものである。

ゲンゴロウブナのアルグルス症は、成熟して産卵行動を行うゲンゴロウブナにアルグルスが多量に寄生したものである。ゲンゴロウブナに寄生するアルグルスの数は、800から1,000に達した。

表3 淡水魚の魚病診断結果

魚種名	病名	年H19										H20				計
		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
アユ	冷水病	1	1	1	1	2	2				2	2	1		13	
	冷水病+グルギア症	1													1	
	ピブリオ病			1									1		2	
	細菌性鰓病	1													1	
	運動性エロモナス病										1	1	1		3	
	水かび病	1					1								2	
	ボケ病+冷水病						1								1	
	過食による腸炎症					2	1								3	
	不明													1	1	
	小計	4	1	2	3	5	2			2	3	3	2	27		
ウナギ	パラコ口病	1		1	1		2		1					1	7	
	パラコ口病+カラムナリス症				1										1	
	パラコ口病+シュードダクチロギルス症							1							1	
	小計	1		1	2		3		1					1	9	
コイ	白点病			1											1	
	KHV検査				1			1		1		1			4	
カワムツ	水カビ病	1													1	
	粘液胞子虫症			1											1	
タカハヤ	粘液胞子虫症	1												1		
ゲンゴロウブナ	アルグルス症				1									1		
合計		7	3	4	6	5	6		2	2	4	3	3	45		